

エゾトリカブト

Aconitum yezoense

キンポウゲ科

名前の由来

「蝦夷」は北海道に分布することから、「鳥兜」は花の形が舞楽の時に使う伶人の冠に似ていることから名付けられた。

漢字名：蝦夷鳥兜



エゾトリカブト

形態的特徴

高さ70~150cmになり、茎は細く上中部で曲る。葉は大きく切れ込み3片に分かれ（3全裂）、2枚の側小葉はさらに切れ込み2片に分かれて手のひら状になる（2深裂）。裂片の縁には荒い鋸歯がある。花は青紫色の鳥帽子形で、茎の先や上方の葉の付け根から出るやや長い柄上に、数個がまとまってつく（花序は総状または散房状）。

類似種と見分け方

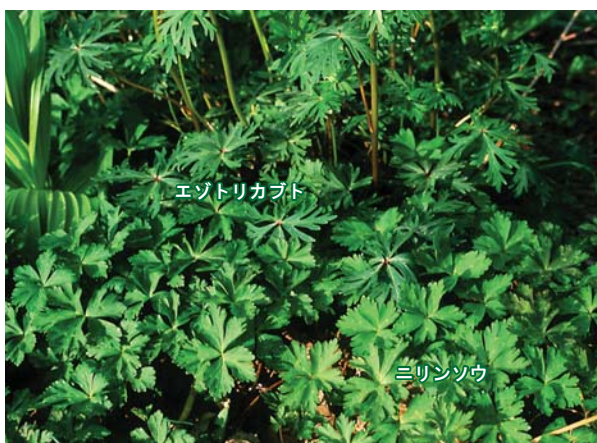
カラフトブシをはじめとする他のトリカブトの仲間（開花期）。オオヨモギ、ニリンソウ（山菜採取時）。

トリカブトの仲間は互によく似ており見分けが難しいが、カラフトブシ、エゾトリカブトでは茎中部から下部の葉が3片に全裂することが特徴で、その点で他の種と見分けることができる。さらにカラフトブシでは、葉がエゾトリカブトより細かく裂けて線状披針形になり、花序は直立する点で見分けられる。

エゾトリカブトは有毒で、若芽の時期は山菜のニリンソウとオオヨモギに似るため注意が必要。

エゾトリカブトは、葉はニリンソウとオオヨモギより細かく深く裂け、茎は高く伸びるのが特徴。確実に見分けるには、ニリンソウは山菜時期に咲く白い花を確認して採取すると良い。

オオヨモギは裏面が白い綿毛に覆われているのがエゾトリカブトとの相違点。



エゾトリカブトとニリンソウが混生している。区別が付かないなら、ニリンソウはあきらめるのが無難



オオヨモギ。葉の裏に白い毛が密生し、青白っぽく見える

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期					■	■						
結実期					■	■						

生育環境・分布

林内、沢沿いに生育する。

分布：日本固有種のため、国外には分布せず。

国内分布は、北海道。

北海道内分布は、全道。トリカブトの仲間は北海道で数種類確認されているが、もっとも普通に見られるのが本種である。

十勝地方では、林内や沢沿いに普通に見られる。時に群生する。



中央がエゾトリカブト。白い花はノリウツギ

生活史

開花時期：8～9月中旬

開花までの年数：不明

寿命：多年草。

他生物との関わり

花には虫が訪れる。



エゾトリカブトの花



エゾトリカブト。花の後ろ側

興味深い話

■葉、根、花に有毒のアルカロイドのアコニチンなどを含み、花の密や花粉にも毒がある。誤食すると、呼吸困難、心臓マヒなどを引き起こし中毒死することもある。アコニチンは青酸カリの100倍近い毒性があるといひ、人の致死量は3～4mg。根をほんの少し食べただけで死ぬ。クマをも殺す猛毒であるといひ。

■出たばかりの葉は山菜のニンソウ、オオヨモギとよく似るので注意が必要。

■母根を漢名「烏頭（うず）」、子根を「ブシ（付子＝母に付く意）」と呼び、ブシをアイヌ民族は矢毒としてクマ狩りに用いた。

■十勝地方のアイヌ語で「スルク」と呼ぶ。

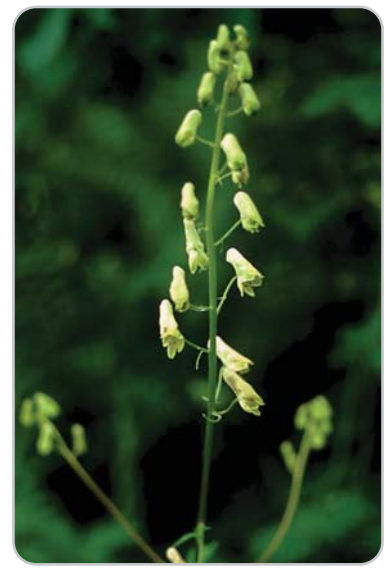
■毒性の強さによって、弱いものをセタスルク（犬のスルク）、中くらいのをヤヤイスルク（普通のスルク）、最も強いものをシノスルク（本当のスルク）と分けたといひ。

■アイヌの人が矢に毒を塗る場合、矢じりは竹で作り、尖先6cmの裏面に溝を掘って毒を

塗り込み、松脂で固定する。効き目は遅いが強い毒のスルクを下に塗り、その上に毒性は弱いが即効性のあるものを重ねて塗るのだといひ。



エゾトリカブト。猛毒を持つ



エゾレイジンソウ。花はクリーム色。こちらも猛毒草

配慮事項

生育している環境全体が重要である

参考文献

「改訂版 牧野新日本植物図鑑」牧野富太郎 北隆館 1989

「北海道植物図譜」滝田謙讓 自費出版 2001

「日本の野生植物 草本II」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1982

「新版 北海道山菜図鑑」佐藤孝夫・小林隆正・久保秀樹 亜璃西社 2002

「アイヌ植物誌」福岡イト子 草風館 1995

「北海道 夏～秋の花 絵とき検索表III」梅沢俊・村野道子 エコ・ネットワーク 2001

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館（編）、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）
草花

（外来種）
草花

哺乳類

（水辺）
鳥類

（草原・樹林）
鳥類